

ストリップパーの逆襲

Rapist by Betty Johnson

子どもの頃から、女の子をいじめるのが趣味だった。十五歳を越えた頃から、趣味が高じて、俺はレイプに走った。同年代の、たいていは処女を犯し、自分のペニスが彼女の血に染まるのを見て、ぞくぞくしたもんだ。いい時代だった。だが、何事もやりすぎるのは、よくない。俺は少年院送りになった。

出所してからは、処女を相手にするのはやめた。二十代前半の、熟れはじめた果実のほうがつとうまいことに気づいた。俺は、何人もの女を、いろんな手で痛めつけたが、運良く逮捕されずにすんでいる。大事なことは、ゆるみのない注意深さと忍耐力だ。

女を犯すのは、俺にとっては肉食獣が獲物を狩るのと同じなんだ。辛抱強くつけねらい、隙を見て飛びかかり、待ち続けたぶんだけ、時間をかけてねちっこくいたぶる。それが俺の生き甲斐だ。

そして今、俺は狩るべき子羊を見つけた。さあ、ゲームのスタートだ！

彼女は、田舎のストリップクラブのダンサーで、名はベティ。その豊かな張りのある胸と、私たちのいい丸い尻に魅せられたのは俺だけじゃないだろう。

初めて彼女の舞台を見たとき、俺は、この犯罪的なまでに魅力ある若い肉体を、どう罰すべきかで、頭がいっぱいになった。

彼女のダンスに合わせて、豊かなブロンドの髪が揺れた。整った美貌には微笑みが絶えない。あの厚い唇に俺のペニスをくわえさせたら、どんな顔をするだろう……。

以来、昼も夜も、彼女の映像が脳にこびりついて離れなくなった。焦ってはいけない、俺はそう自分に言い聞かせた。

いずれ、俺は彼女を犯す。豊かな胸とは対照的に、小柄で細いボディだ。抵抗されたってたいしたことはない。何より女なんだ。組み敷いてしまえばこっちのもんだ！

そう、あの女は、俺の犠牲者となるべく生まれてきたんだ。

俺は、プランを細かく煮詰めた。

まず、どこで彼女を拉致するか、だ。

クラブの裏手には駐車場があり、仕事を終えると彼女は、裏口から駐車場まで歩き、車に乗って帰宅する。だが、駐車場はそこかしこに監視カメラが設置されている。ここでさらうのはまずい。

次に、帰宅する彼女を尾行して、住んでいるアパートを突き止めた。アパートの駐車場から入り口までは、監視カメラは設置されていないが、照明は十分すぎるほどで、目撃される危険があ

る。だが、アパートの階段付近は、外から死角になっている暗がりがあった。

よし、そこでさらおう。プランは一気に形になり始めた。

次に、彼女の車に、電波発信機を取り付けた。車で尾行するのはリスクが大きい。俺がいつも犯行用に使ってるバンは、ちよいと目立つ。発信機のおかげで、俺は彼女の行動をある程度把握することができる。

彼女は毎夜、同じ時刻にクラブを出るが、帰宅する時間はまちまちだ。深夜営業のストアに立ち寄りたり、誰かの家を訪ねたりしているようだ。

こうなれば、アパートの前で、いつ帰ってくるかわからない彼女を待ち受けるしかない。

昨夜、俺は待ち伏せを実行した。だが、忌々しいことに、アパートの駐車場に車を停めて出てきた彼女は、男連れだった。二人は、いちやつきながらアパートに消えた。

俺は、潜んでいた物陰から飛び出し、男を絞め殺してやりたい衝動を必死に抑え、バンに戻った。

すぐそこに彼女がいるのに……。俺は恨めしげに、アパートの窓を見つめた。いま、あの男は、彼女のすばらしい肉体を弄んでいるのだろうか。それとも、あの唇に性器をつっこみ、刺激的なサービスを受けているのだろうか。妄想は広がった。

いっそ、彼女の部屋に踏み込んでやろうか。あの男を叩きのめし、縛り上げ、目の前で彼女を

レイプしてやろうか。そして、事が果てた後、二人ともに地獄に送ってやろうか。それも一興かな……。

だが、俺は耐えた。プランにない事をやるのは、危険だ。

そして今夜。

俺は、アパートのそばにバンを止め、彼女の帰宅を待った。今夜こそ、一人きりで帰ってくることを願いながら。

必要なものは全部そろっている。後部座席はダブルベッドになっていて、セックスを楽しむのに十分なスペースがある。

電波の受信機が反応した。彼女の車が、半マイル以内に接近してきた証拠だ。

心臓が早鐘を打った。呼吸が乱れた。俺はバンを降り、いつもの物陰に潜んだ。

アパートの駐車場に彼女の車が現れ、停車した。降り立った彼女は、一人きりだった。

いまだ。

ヒールを鳴らして、彼女は階段に歩み寄った。大きな胸を揺らしながら、彼女の小柄な体が暗がりに入る。

俺はすばやく彼女の背後に駆け寄った。振り向くいとまも与えず、そのうなじにスタンガンを当てた。

彼女はぐったりと俺にもたれかかってきた。俺は彼女を引きずってバンに連れ込み、ドアを開めた。

後部座席に仰向けに寝かせ、しばらく、そのボディを鑑賞した。盛り上がった乳房が白いブラウスの下に息づいている。赤いミニスカートから伸びた見事な脚。俺のペニスはずでに勃起していた。今すぐ、彼女を裸にし、そのヴァギナに突っ込みたかった。

だが、俺は自制した。スタンガンの効果は一時間ほどしか効かない。証拠を消しておかねばならない。

俺はバンを出て、彼女の車まで走り、発信器をはずした。それからバンに戻り、アクセルを踏んだ。

人気のない郊外までバンを走らせ、「お気に入り」の場所に運んだ。

そこは、いちばん近い街まで、車で30分、歩けば半日はかかる草地である。滅多に人が立ち入ることはない。そして、俺の手にかかった犠牲者たちが眠る場所でもある。

俺はバンを止め、カーテンをしめて窓を覆った。自分の服を脱ぎ捨て全裸になった。ついで、ベティの靴を脱がせ、かわいらしい足にキスした。それからブラウスをはぎ取り、ブラジャーをはずし、なめらかな腹や、豊かに実った乳房を舐めた。さらにスカートとパンティもとった。陰部を指でまさぐった。

至高の時間……。無防備に意識を失った女を弄ぶ、この瞬間を味わえるのなら、何だってやる。

いや、もうすぐ彼女は目を覚ます。その前に縛ってしまわねば……。

少しずつ、私は悪夢から覚めた。

ぼやけた眼で周囲を見回す。どうやら、バンのなかのようだ。窓はカーテンが引かれ、外は見えない。体を起こそうとして、手が動かなかった。

私は全裸で、両手を前に回したかたちで縛られていたのだ。

目の前に、筋骨隆々の大男が座っていた。見たこともない男で、私と同様に全裸だった。眼が、いやらしく私の体をなめ回していた。

しびれていた意識が、クリアになった。

「なんなのよ、これ！」

悲鳴をあげた私に、男は舌なめずりをしてにやりと笑った。

「目がさめたかい、いい子ちゃん？ 待ちかねたぜ。寝てる間にやっちゃいたくて、うずうずし

てただよ

「何いってんのよ？ あんたなんか知らないわ！ なんで、あんたなんかとやらなきやいけないのよ？」

「言っておくが、あんたに選ぶ権利はないんだぜ。俺はあんたを好きなようにできる。いつ、どのようにやるか、決めるのは俺だ」

私は、かっとなった。はじめられたように起きあがり、男に体当たりした。無我夢中で足をばたばたさせ、金切り声をあげ、かみっこうとした。

だが、無駄だった。男は私を突き飛ばし、仰向けに寝かせ、腹部にまたがった。縛られた両手を押さえつけ、なおも嘔みつきょうともがく私をせせら笑った。男はとても重く、力も強かった。

分厚い胸板に、氣力が萎えた。

私は抵抗をやめた。

いや、やめたわけじゃない。

ここは頭を冷やして、考えなければ……。

「おいおい、おとなしくなっちゃだめだよ」

男は、私があきらめたものと勘違いしたらしい。

「俺は裸の女が、無駄な抵抗してくるのがめっちゃめっちゃ好きなんだからさ」

「そういうの好きじゃないの」

私は毅然として言った。

「とにかく始めましょうよ。フェラチオしてあげましょうか？ みんな言うわ、私のフェラチオはワールドクラスだって」

男は顔をしかめた。

「その手に乗るもんか。どうせ、俺のペニスを食いちぎろうって腹なんだろ。バカにするんじゃないねえ！」

「あら残念ね、気持ちよくさせてあげたのに……。じゃあ、なんでもいいから、さっさと済ませ、帰してよ」

「帰す、だど？」

男は呆れたように笑った。

「まだわかかってねえようだな。いいか、おまえをどうするか、決めるのは俺だ。おまえが口をはさむことじゃねえ！ すぐに帰すわきゃねえだろ、俺はこのプランを数週間かけて練ったんだ！」

「ご苦労様……そんなに私って魅力的？」

「口の減らない女だな」

男は、ぞくりとするような残酷な笑みを浮かべた。

「強がってられるのもいまのうちだぜ。俺の本性を知ったら、そんな口はたたけねはずだ。獲

物を食う前にいたぶってる猫を見たことがあるか？ 俺がその猫なんだよ。時には何日もかけていたぶるんだ。いや何週間かかけたこともある。繰り返しレイプし、拷問するんだ。獲物が何も感じなくなるまでね」

さすがの私も、恐怖が芽生えた。

「何よ……脅そうっていうの」

「顔がこわばってるぜ、少しはおびえてるようだな」

男は満足そうに続けた。

「悲鳴をあげたけりゃあげるがいい。ここから人間が住んでるところまでは20マイル離れてる。

誰も聞きやしねえ……女の悲鳴くらい、美しい音楽はないからな。何度でも聞かせてもらおうぜ」

「大勢、こんな目に遭わせてきたのね……」

「ああ、数えきれねえくらいな……おまえが初めてでもないし、最後でもない」

「いたぶった後は、どうするの？」

私の声がうわずっていた。

「ここに放置しとくのさ……まあ、その日のうちに死ぬな」

「殺すのね……」

不思議なことに恐怖がしだいに収まり、かわりに怒りがこみあげてきた。

「なんで、そこまで残酷になれるの？ 女性が嫌いななの？」

「大嫌いだね！」

彼は吠えた。

「大嫌いだよ。あいつら、俺のことをバカにしやがって……自分らが俺より、ずっと上等な人間だとうぬぼれてやがる……俺が頼み込んでも、やらせてくれねえ……だから、レイプしてやるんだ……俺より上等の人間なんて、この世には存在しねえんだ！」

男は錯乱していた。車窓を何度も拳でたたいた。

それから少し落ち着きを取り戻し、あの冷たい笑みを浮かべ、ダッシュボードからスクラップブックを取り出し、開いて私の鼻先に突きつけた。

「こいつは、俺のお宝なんだ」

見ると、行方不明になった女性についての新聞の切り抜きが何枚も貼られていた。

「みんな、このあたりに眠ってるよ……いろんな女がいたな。抵抗するやつ、従順なやつ、しくしく泣いてたやつ……でもみんな、最後は同じ運命さ」

「出してよ！」

再び、恐怖が私を包んだ。パニックに陥り、狂乱状態となった。

「お願い！ ここから出して！ 帰してよお！」

「いいぞ、その調子だ！」

男は狂喜した。

「時間はたっぷりある。じつくりいじめてやるよ……まず、俺が勃たなくなるまでおまえを犯し続けてやる……その後は、ベースボールのバットをつつこんで、血まみれにしてやる……その後、はけつの穴につつこんでやる……今夜やることはそこまでだ」

「お願い……怪我はさせないで……」

「明日はもっと楽しいことをしてやろう……道具はそろってるんだ」

男は得意げに、床においた黒いボックスを開けてみせた……ロープ、電動ノコギリ、錐、手術用のメス、ペンチ、ナイフ。

それらの責め具に、吐き気がしてきた。同時にまた、怒りがこみあげた。

「あんたは最低よ……病気よ……。あんたのけつの穴にショットガンをつつこんで、ずたずたに破裂させてやりたいわ……」

「あばずれめ……こういう生意気な女をずたずたに切り裂いてやるのが、俺の趣味なんだよ。また興奮してきたぜ」

確かに、一時萎えていた彼のペニスは、しだいに固く隆起しつつあった……10センチにも満たない、小さいペニスだった。

「さあ、始めようぜ……準備万端整ったからな」

男は私にのしかかってきた。

いまだ

私は両手を縛られていたが、後ろに回されていなかったことが幸いした。左右の人さし指をつきだしてドリルをつくり、彼の眼球を思い切り突いた。

男がのけぞった。

すかさず、私は右の膝を突き上げた。

膝頭が正確に、男の睾丸を蹴り上げた。

「ぎゃあああ！」

男は悲鳴をあげてベッドから転げ落ちた。両手で股間を押さえ、悶絶している。

私はすぐに行動を開始した。

男が開いてみせたボックスのなかに、スタンガンらしいものが入っていたのは、すでに確認済みだった。

私は縛られた両手でスタンガンをつかみ、男の肩に押しつけ、ボタンを押した。

男は痙攣し、意識を失った。

せいぜい10分かしら……。

男が意識を取り戻す前に、こちらが絶対的に優位な状況を作っておかねばならない。

道具箱のナイフを使って両手のロープを切り、助手席に重ねてあった私の服を身につけた。そ

して、ドアを開けて外に飛び出した。

あたりは真っ暗だった。

やつと闇に眼がなれて見回すと、かなり広い草地のど真ん中だった。

このまま逃げても、どこに走れば助かるのか、見当もつかない。眼をさました男がバンで追いかけてくれば、捕まる可能性のほうが高い。

私は勇気を奮い起こしてバンに戻ることにした。

まず、もう一度スタンガンを男の後頭部に押しつけ、電気ショックを与えた。目を覚ますのが少しでも遅くなるように。

それから床を見回した。マットレスの四隅に、重い金属製のひも穴が穿たれている。何に使うつもりだったのか、太いロープも置いてあった。

私は、男を仰向けにし、手足を大きく広げ、両手首と足首にロープを巻き付け、マットレスのひも穴に固定した。

逃げる事が出来ない以上、それなりの報復をさせてもらうつもりだった。私だけではなく、悲惨な最期をとげた大勢の女性たちのためにも。

私は、男の頬に平手打ちを食わせた。

「起きなさい！ このクズ！」

臉をあげた男は、しばらく呆然と周囲を見回していたが、突然、全身をばたつかせて吠えた。

「なんだ、こりやあ！ てめえ、何するつもりだ！」

「ご心配なく、負け犬さん。あんたが私にしようとしたことへの、正当な報いを受けてもらうだけだからね」

「この気違い女！ すぐ、ロープをほどけ！ さもないと、ずたずたに引き裂いてやるぞ！」

男の巨体が暴れるので、バンがゆさゆさ揺れた。私は笑った。

「大きな凶体を揺らさないでよ。それにしても、そんないい体してるのに、肝心のあれはちっちゃいのねえ……。経験豊富な私でも、見たことがないくらい小さいんだもん。でも、問題はあんたの金玉ね。ペニスにくらべて、不釣り合いなくらい大きいわ。その金玉のせいで、あんたは女をレイプしたくなるんでしょ？ だから……」

私は手を伸ばして、彼の睾丸を爪弾きにした。男は小さく悲鳴をあげ、身をそらせた。

「いっそ潰してあげる……。あんたが真人間になるようにね」

「ちよ、ちよっと待て……」

男は青ざめ、卑屈な笑みを浮かべた。

「お、俺が言ったことを真に受けたのかい？ あ、あれはジョークだよ。あんたをちよっと怖がらせてみただけだよ……。俺は誰もレイプしたことはないし、怪我なんかさせたこともねえんだ

「お」

声が裏返っていた。

「ふうん、じゃあ、あの切り抜きも、嘘だっていうの？」

「も、もちろんだ。あんたを怖がらせて、からかってみただけなんだよ……」

「どっちだっていいわ」

私は冷たくあしらった。

「あれが偽物だとしても、私をレイプしようとしたことには変わりはないんだもの、ちゃんと罰は受けてもらおうわよ」

「た、頼むよ……」

男は涙目になっていた。

「なんでも言うことをきくから……。お願いだよ……」

「私がそう頼んだとき、あんた、聞く耳もたなかったじゃない」

鼻で笑いながら、私は男の睾丸をひねりあげた。男は身をのけぞらせ、苦しげな悲鳴をあげ、吠えた。

「て、てめえ……。大事なところを……」

「大きくて、とても弾力があるのね。潰しがいがありそう」

「……。やってみやがれ！ 一生つきまとってやる！ 呪ってやる！」

「おお……こわい」

私は、もう一つの睾丸をひねった。男は絶叫し、首を左右に振って悶絶した。

「でも、私につきまとはって何をしようと言うの？ こんな鉛筆みたいなペニスで私をレイプする気？」

睾丸から手を離し、涙に濡れた男の顔に平手打ちを食わせた。

「さてと、そろそろ始めましょうか。あんたみたいな男にどんな罰を与えるか、いま教えてあげる」

「な……何をやる気だ」

「ずいぶん、いろんな道具を揃えてるのね」

私は、責め具の入ったボックスを見つめながら言った。

「でも、私には必要ないわ。道具なしで、あんたを八つ裂きにしてあげる」

「へっ、何をいいやがる……」

顔面蒼白でふるえながらも、男はなおも強がった。

「てめえみたいな小娘に、何ができるっていうんだ……、格闘技かなにか、やってたとしても言うのか？」

「そんな手のこんだことはしないわ。もっとシンプルな武器を使うのよ。シンプルだけど、とても強力で、すごく痛い思いをさせられるもの……つまりね……」

私は、彼の鼻先に顔を寄せ、口を大きく開いて笑ってみせた。

「歯を使うの」

「歯……？」

「そう、噛みちぎってあげる」

男の呼吸が一瞬止まった。私は、その耳たぶを軽く噛んだ。彼の全身が、電流に打たれたようにびくりとなった。

つづいて彼の乳首に軽く歯を立てながら、言った。

「相手に怪我をさせたいときには、噛むことにしてるの。ちょっと噛むだけで、大の男を失神させることもできるのよ、ある箇所を噛めばね」

彼の腹部を軽く噛みながら、私は睾丸をひねった。彼はのけぞり、苦痛と恐怖の悲鳴をあげた。

「歯が食い込んで、血が噴き出して……血のにおいがかぐと、私は野獣になっちゃうの。相手が泣き叫んで、やめてくれーって頼んでも、やめられなくなっちゃうの」

私はそう言いながら、彼の肩に噛みつき、深く歯を食い込ませた。

男は絶叫し、身をよじった。血が噴き出し、独特のにおいが鼻孔をついた。

私は次に、男の指を一本いっぽん噛んだ。食いちぎりはしなかったものの、男は激しくのたう

ち回った末に、ついに悲鳴をあげる気力さえ失った。

顔をあげ、血が滴る唇を拭っていると、男は涙に濡れた眼で私に哀願した。

「たのむ……もうたくさんだ……やめてください……お願いします……」

男の肩から、胸から、血が滝のように流れ、十本の指は今にもちぎれてしまいそうにだらしないくぶらさがっていた。

「やめるかどうか、決めるのは私よ」

私は、彼の耳を噛んだ。今度は強く。

男は静かにすすり泣くばかりだった。

私は彼の股間に手を伸ばした。片手のなかに収まってしまいそうな男のペニスをしごきながら、彼の耳元でささやいた。

「これからが本番よ」

そして、彼のペニスをくわえた。

男は絶叫した。

肩や指を噛んだ時とは比べものにならないほど、恐ろしい咆哮だった。

私が、彼のペニスのあちらこちらに歯形をたてる度に、男は血を吐くばかりに叫び、痙攣した。

「やめるおとおおおおおお！！！！」

苦痛だけではない。去勢される恐怖。何度聞いても、心地がいい。

「この、人食い土人が！」

ペニスから顔を離した私に、男は罵詈雑言を浴びせた。

「てめえ、何者だ！ 野蛮人め！ 人間のすることじゃねえ！」

「今からそうわめてちゃ、体がもたないわよ」

私は、血まみれの唇をゆがめて笑った。

「まだ始まったばかりだというのに……困った泣き虫小僧ね」

ペニスの先端をつまみ、左右に揺らしながら続けた。

「今からそんなに痛がるなんて……、これから、噛みちぎられて、なくなっちゃうっていうのに」「や……やめる……」

男は打って変わって哀願調に戻った。

「約束する……絶対に、生涯、レイプなんてやらない……もう女には近づかない……誓うよ、だから……」

「立派な誓いね。ちゃんと守れるように、噛みちぎっておいてあげるわ」

私は彼の股間に顔を埋め、ペニスをくわえた。

彼のペニスは固く勃起していた。あれだけの激痛と恐怖にもかかわらず、元気にそそり立っている。

別に珍しいことではない。急所を蹴られて勃起する男は結構いる。去勢される恐怖が、本能的に最後の射精を促すらしい。

私は、固くはりきったペニスの表皮に歯を食い込ませた。これまで噛んだペニスのなかでも、いちばん固い。まるで古いタイヤを噛むようだった。完全に噛みちぎるのは無理かな……と思いつつ、私は新しい挑戦を楽しんだ。

深く噛み、歯を埋め込み、口を離し、別の場所に噛みつく。

私は繰り返し、彼のペニスをぎくぎくに切り刻んだ。

その都度、男があげる苦痛の絶叫、恐怖のうめき、絶望的な嗚咽、プライドのかけらもない哀願、その一つ一つが、途方もない快楽となって体のなかでうずくのだ。

最後に私は、それまで無傷で放って置いた亀頭を責めた。頬に深くくわえこみ、奥歯を押し当て、陰茎の裏側に舌を走らせた。男が、苦痛とも愉悦ともつかないうめきをもらす。同時に、奥歯をぎゅつと噛みしめた。

男は大きく痙攣し、動かなくなった。

私はしばし、苦悶の表情のまま白眼を剥いて失神している男を見つめた。

肩から噴き出た血が上半身を赤く染め、ペニスを中心に下腹部も真っ赤だ。いたるところに歯形をつけられた。ニスだけが、むなしく屹立していた。

私は、自らの体をまさぐり、しばし自慰にふけた。

「起きなさい！」

ひとしきり快楽を楽しんだ後、私は男をたたき起こした。

男はけだるげに臉をあげ、急激に蘇った激痛にうめいた。

「まだゲームは終わったわけじゃないんだからね！」

私は笑いながら、床に置いたロープの端を握った。

「……もう、いいだろう……」

男はしわがれた声をもらした。

「頼む……もう勘弁してくれ……」

「決めるのは、わ・た・し！」

私は、つま先で股間を蹴った。男は悲鳴をあげ、身をよじって悶絶した。

「バンの外に、樹が立っているでしょう」

嗚咽する男を尻目に、私はロープの端を振り回しながら言った。

「それを見て思いついたの」

男の緊張が次第に和らぎ、呼吸が乱れた。上目遣いに見ると、眼を細め、口を半ば開き、性的な興奮を味わっていた。

「これで最後よ」

私は睾丸を吐き出し、男に向かって微笑んで見せた。

「もう二度と味わえないんだから」

男が顔を上げた。眼を恐怖に見開いていた。

私はすかさず、睾丸を口にふくみ、奥歯で一気に噛み砕いた。

パンの内部に、鼓膜が破れそうなほど、恐ろしい咆哮が轟き、すぐに静寂が訪れた。

顔をあげると同時に、ペニスの先端から、陰囊の裂け目から、血を含んだ精液が噴水のように勢いよく迸った。

男としての、断末魔の射精だ……。

吹き上がる精液を見ながら、指が自然と陰部に伸びた。

男は白眼を剥き、激しく痙攣していた。尻が激しく上下していた。

体内をアドレナリンが駆けめぐり、私は激しく指を動かした。右手でクリトリスを刺激し、左手で乳房を揉んだ。

大きく声をあげ、何度ものけぞりながら、押さえきれない快楽を解放させた。

そして絶頂が訪れ、私は意識を失った。

眼が醒めると、すでに朝だった。

小鳥のさえずりが、爽やかな朝の空気とともにパンの中に入ってくる。

だが、同時に血と精液の入り交じった独特の匂いがたちこめている。パンの窓やドアをすべて窓を開け放って空気を入れ換えた。

外に出た。

太陽が朝靄を通して光を注いでいる。

思い切り両腕を伸ばして深呼吸した。

とても気分がいい。今日もいい一日になりそうだ。

パンに戻ると、男が虚ろな眼を空けていた。

「おはよう、よく眠れた？」

男は応えず、呻くだけだった。

「お腹空いたわ、何かない？」

「たのむ……」

男はやつと声を絞り出した。

「病院へ……」

「朝ご飯はないの？」

「そのバスケットのなかにパンとコーヒーがある……全部やるから……頼む……病院へ連れて行ってくれ……」

「しおらしいこと言うじゃない」

私は微笑んでみせた。

「でも、私、朝食には必ず肉を食べることにしているの。それも新鮮な生肉をね。近くにお店はないの？」

「……頼むよ」

男は眼を閉じ、泣き出した。

「痛いんだ……頭ががんがんする……死にそうなんだ……」

「仕方ないわね……じゃあ、このお肉でも食べようかな」

私は男にすり寄り、しおれたペニスをつまんだ。

「やめてくれえ!!!」

男は驚くほど大声で叫んだ。

「頼む……これ以上痛くしないでくれ！ もう十分だろ！」

「そうはいかないわ」

私は冷たく言い、平手打ちを喰わせた。男はすすり泣いた。

「あんたがレイプして殺した女たちと同じ思いを味わってもらおうわよ」

ボックスから、電動ノコギリを取り出した。

男は絶叫し、全身を左右に振って暴れた。

「これであなたのペニスを切断するわ。このパンはしばらく借りるわよ。もちろん、病院になんか連れて行ってあげない。あんたをここに放置して、死ぬまで地獄の苦しみを味わわせてあげる。当然の報いよ」

私は電動ノコギリのスイッチを入れた。重い唸りをあげるノコギリに、男は啜り泣き、わけのわからないことを呻きはじめた。

「あんたは負けたの。敗者が得るものは……何もないのよ！」

パンを走らせながら、私は煙草に火をつけた。

ラジオから流れてくる軽快な音楽に合わせて歌いながら、突っ走った。

さて、家に帰ったらシャワーを浴びて、少し寝て……起きるのは三時でいい……それからいつものお仕事。そういえば、今夜は、小金持ちの常連からお誘いがあったはず……なんかマゾっばい顔つきだったから、思い切り虐めてあげよう……お金を巻き上げておいて、ペニスを噛みきってやろうかしら……

また、股間から欲望が立ちこめてきた。私はパンを停め、しばし自慰に耽った。(